

子どもの成長を支える

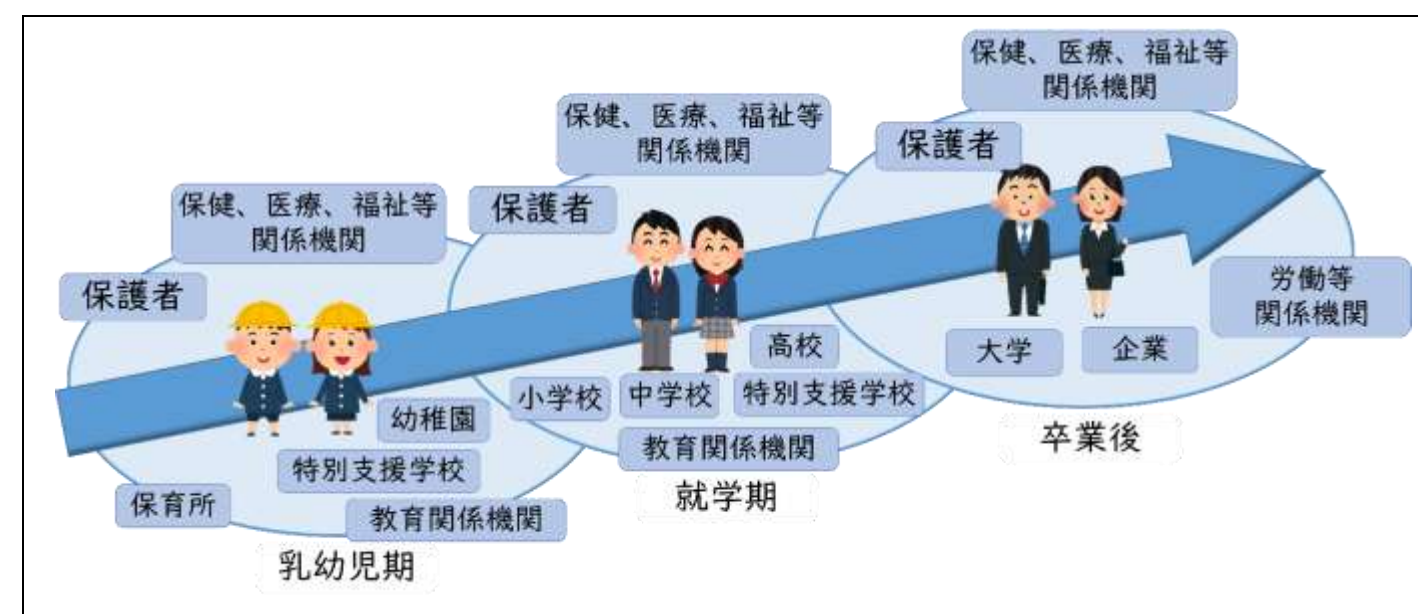
教育は、「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」を期して行われます。つまり、子ども一人一人の心身の調和の取れた発達を促し、社会の一員として自立し、よりよく生きる力を育むことが求められます。そのためには、単に知識や技能を教えるだけでなく、子どもの成長を支える視点が必要不可欠です。

子どもの成長過程と生じやすいつまずきや困難さを知る

子どもは、発達段階に応じて、身体的・認知的・社会的に異なる課題があります。特に、進学に伴う環境の変化は、子どもにとって、心理面や学習面、生活面、社会面に大きな影響を与えます。特別な教育的ニーズのある子どもにとって、成長の過程や生活環境の変化は、つまずきやすさや困難さに大きく影響します。例えば、「幼児期には気付かれなかった困難さが、小学校で学習量が増えたときに表れる」「高等学校で計画的に行動する場面が増えて、自己管理が求められるようになり、困難さが増す」などの場合があります。このように、子どもの困難さや支援の必要性は、発達段階や環境の変化に応じて常に変化していきます。そのため、子どもを長期的な視点で理解し、どの段階でどのような課題が生じやすいかを知ることによって、子どもの困難さに早期に気付くことができ、適切な支援につながります。

切れ目ない支援体制づくり

小学校就学前の乳幼児期から高等学校卒業後まで、それぞれの年代における子どもの望ましい成長を促すためには、切れ目ない支援体制を整えることが重要です。特に、特別な教育的ニーズのある子どもにとっては、円滑な発達や学習を保障するために切れ目ない支援体制が必要不可欠です。そのため、乳幼児期から高等学校卒業後までの、長期的な視点に立った個別の教育支援計画の作成や学校間等の確実な引継ぎが欠かせません。また、引継ぎにおいて、環境の変化に伴って生じ得る困難さと、その予防や対応に役立つ支援方法を伝えることが大切です。学校が子どもの成長を長期的に捉えることで把握した将来のつまずきや困難さの予測、効果が見込める支援の方向性が、進学先の学校にとって大きな手掛かりとなり、子どもは安心して新しい学校生活を始めることができます。そのためにも、子どもの成長過程や環境の変化、さらにそれに伴って生じやすいつまずきや困難さを知ることが大切であり、それらを次の段階に伝えることが、切れ目ない支援体制づくりにつながっていきます。



子どもの成長過程

